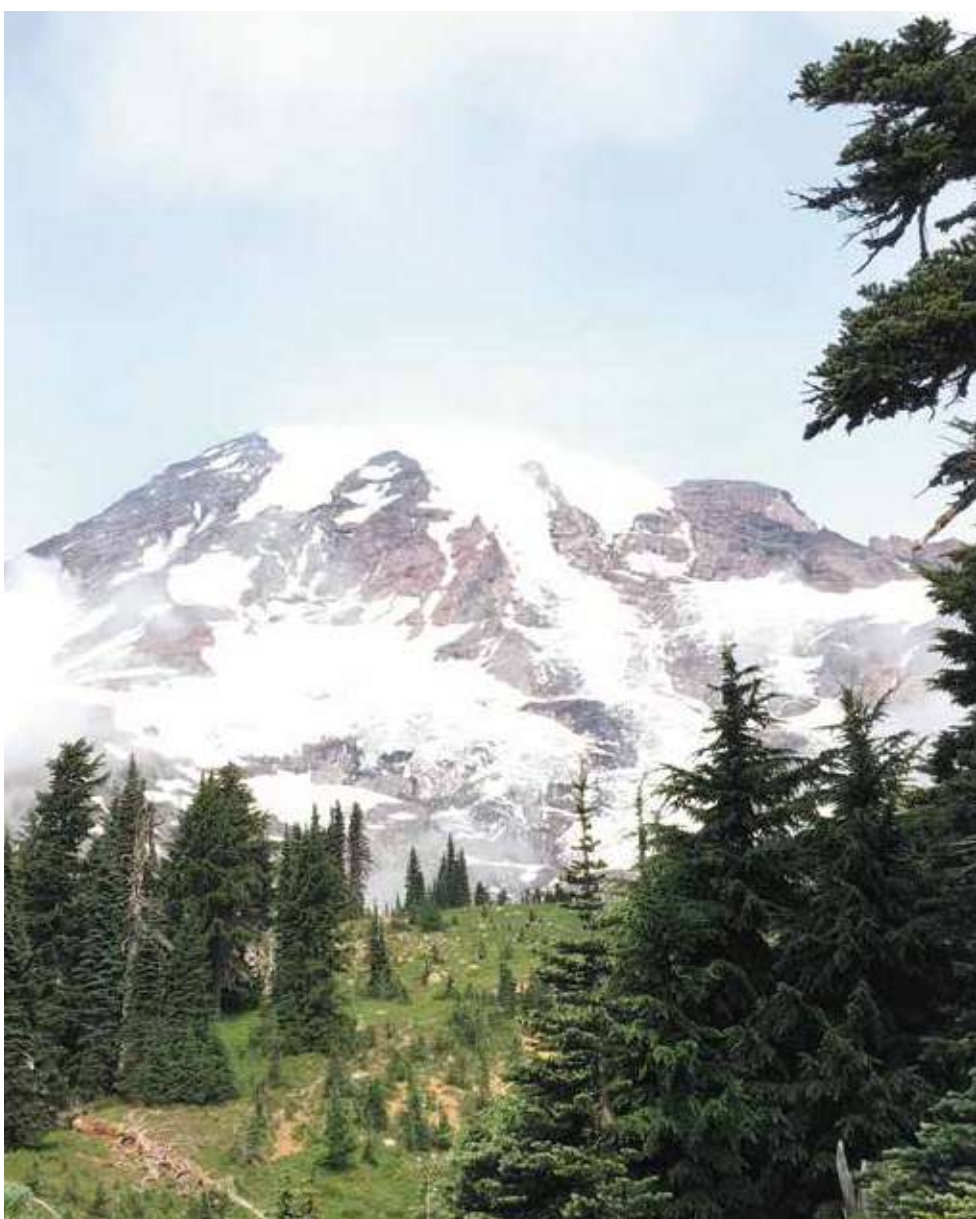


yagotosanbunko

八事山文庫



Slow—土に地にふれる



スノーコールミー滝

日本には日本らしい四季折々に風趣豊かな山海の自然があるように、ひとたび海を渡れば、それぞれの国や地域に、想像をはるかに絶する別世界や大地がひろがっています。八事山興正寺では、“お寺のある暮らし”を長期的な視座で考えていく「グランドデザイン構想」のもと、日本人が大切にしてきた簡素と簡潔の中に美を見出す（スモールな生活観）、慎ましさ（合理性をバランスよく表現する（シンプルな美意識）、そして天地自然に対する畏敬の念を忘れない（スローでスピリチュアルな感謝の心）など、古人が残してくれた心の文化性への回帰を追求していきます。

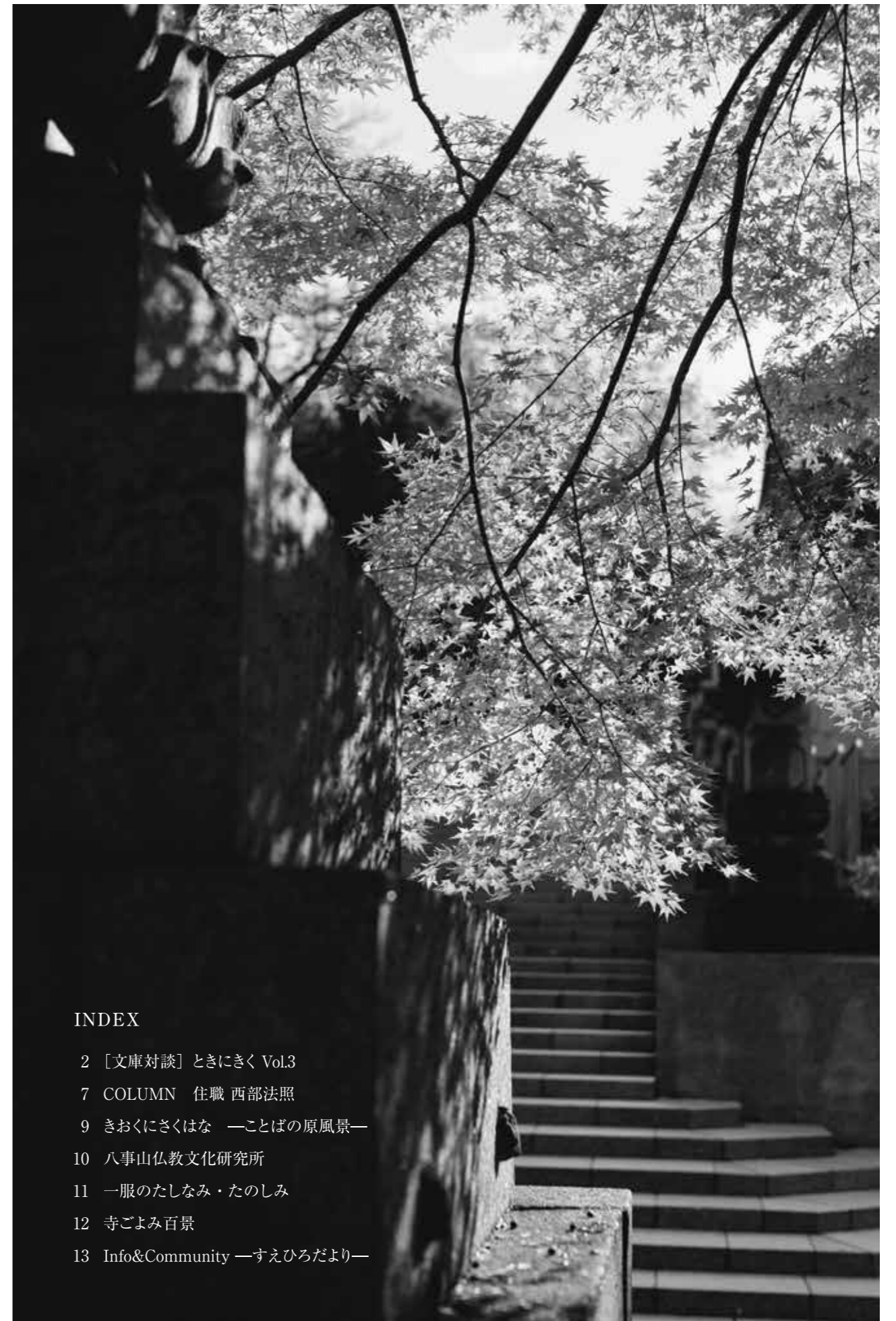
そうした思想の原点となるのが、西部住職が2005年に開山した『シアトル神護寺』。豊かな自然との共生にまつわる数々のエピソードは、しばしば法話の中でも語られてきました。

このたび、2024年6月に、僧侶、職員および寺関係者とともにより

雄大なアメリカの自然を体感 シアトル紀行

あるシアトルの地へ、1週間の視察旅行に赴きました。その旅の記をご紹介します。

日程：令和6年6月7日（金）～13日（木）



INDEX

- 2 [文庫対談] ときにきく Vol.3
- 7 COLUMN 住職 西部法照
- 9 きおくにさくはな —ことばの原風景—
- 10 八事山仏教文化研究所
- 11 一服のたしなみ・たのしみ
- 12 寺ごよみ百景
- 13 Info&Community —すえひろだより—

シアトル紀行

八事山興正寺 住職 西部 法照

今年6月、久しぶりに米国シアトル訪問の機会を得ました。私にとってシアトルは15年間の在任期も含めて第2の故郷ともいえる近しい存在の都市です。興正寺の関係者と共に総勢九名、1週間の短い旅ではありましたが、シアトル在住の皆さんとの旧交も含めて懐かしさがこみあげる充実の日々を過ごすことができました。コロナ過も少し落ち着いていたこの時期に幸せな機を得た感謝も含めて、旅のご報告を綴らせていただきます。

6月7日夕8時過ぎ羽田空港を飛び立った全日空NH118便は、同日の午後2時頃シアトル空港に着陸しました。え、時間が戻るの？・そうです。日本とシアトルの間には17時間（アメリカ西部夏時間）の時差がありますから、時間が戻ってしまいます。すごく得した気分ですが、でも心配はありません、帰りの便でシアトルから日本に戻った時は逆に17時間がプラスになりますから

風上に向かっていますから。

空港の南東方向には、まだまだ白雪に覆われた標高4700メートルのレニア山が西からの陽射しにその雄姿を神々しく輝かせていました。このレニア山、日本の富士山に似て美しい姿の独立峰です。レニア山近くの都市タコマ市の名を借りて「タコマ富士」の別名があります。（タコマ市）は日本からの移民初期には多くの日系人居住地があったようですが、タコマ富士はそれらの方々の心の表象でもあったのでしょうか。

レンタカーでの1週間の旅

空港からは12人乗りのレンタカーを使い、ホテルへと向かいました。これから1週間の旅程、移動手段は全てレンタカーです。

（ベルビュー市）中心部のホテル、ハイアットリージェンシーまでは30分ほどのドライブですが、移動距離は50キロほど。フリーウェイが縦横に整備されたアメリカでは、1時間の移動距離は100キロメートル程度で、日本とはほぼ変わりませんが、根本的な違いはアメリカ国内の何処まで行っても高速

チャーンと間尺が合うようになっています。人生も同じですよ。

緯度の高いシアトルは夏の日照時間は16時間、日暮れは夜10時頃です。この日照時間もまた同じ、冬の日照時間は半減して8時間ほど、夕方4時には暗くなり、朝陽が出るのは8時過ぎ、その間の16時間は暗闇ですからこれも夏と冬では、ちゃんと間尺が合うように天空の仕組みがそうになっているのです。

日本を出発したアメリカ西海岸の飛行機は、通常北海道沖からカムチャッカ半島をかすめてアラスカ/カナダ国境付近から南下、バンクーバー沖からシアトル市の北方、市内上空を経て、市の南方にあるシアトル空港に着陸します。

何故、日本から太平洋をまっすぐに横断してシアトルへと飛ばないの？この不審の向きは、地図ではなく地球儀をよくご覧になってください、合点がいくと思いますよ。緯度が高くなるほど経度間距離は短くなります。東京は北緯35度、ロサンゼルスは北緯33度、でもシアトルは北緯48度、だからシアトルは、日本から一番近いアメリカなのです。

道路料金は全て無料。通勤の多くもフリーウェイ、出入口のゲートもありませんから快調です。

私達の車は、空港を出てすぐにフリーウェイI5を北進してシアトル市内方面へと向かいましたが、この道は片側5車線、上下で10車線です。I5は、インターステイト（州間国道）5号線の略称で、アメリカ大陸の西海岸近くをメキシコ国境から北上、カリフォルニア州ロサンゼルス/サンフランシスコ、オレゴン州、ワシントン州を貫いて、北のカナダ国境に至る延長3000キロ以上の大動脈です。

I5の5は、奇数番号ですから南北の道路、偶数番号の道路は東西に延びる道を表しています。シアトルからは、I90号線が東海岸ポストンまで7000キロ以上フリーウェイが続いています。1日1000キロを走ったとしても1週間以上かかるでしょう。それに東西移動ですから、同じアメリカ国内でもシアトルとポストンの間には時差が3時間あります。ポストンからシアトルへ飛行機で移動すると時計上は1時間で着いてしまおうということになります。



右上/移動途中の広大な風景
左上/スノーコミッシュの滝にて
右下/シアトルビル街にて
左下/シアトルビル街

ワシントン州シアトル

シアトルはアメリカ合衆国48州の中、ワシントン州の中核を成す商業都市で、人口約100万人程ですが、衛星都市を含めたメトロポリタン全体では300万人以上と言われています。特に先端産業、ハイテク産業の集積は全米でもトップクラスでしょう。航空機のボーイング社、PCのマイクロソフト社をはじめ先端技術産業や、IT産業は、サンフランシスコ郊外のシリコンバレーと共に、両雄とされています。それに日本でもお馴染みのスターバックスコーヒーは、シアトルの1号店から始まりました。

扱って、そこで多くの方が戸惑われるのが、ワシントン州の名称でしょう。アメリカ合衆国の首都「ワシントンDC」は、大陸の反対側、東海岸にある特別区で、どの州にも属していません。どちらも名称の由来はアメリカ初代大統領に依ることとは間違いありませんが、紛らわしいですね。

シアトル近郊

今回の宿泊は、（シアトル市）

シアトル国際空港到着

さて、機内での眠りから目が覚めて、気付くと今回の私たちの搭乗機は、万年雪を残した高い山々の上を飛んでいるじゃありませんか。何処だろうと驚きましたが、あ、これはオリンピック半島だ、と私は直ぐに理解しました。

日本の世界地図で見るととき、シアトル港は太平洋に直接面しているように見えるのですが、実はシアトル湾の西側には3千メートル級の山々が幾重にも連なるオリンピック半島があり、その半島が太平洋に直接面しているのです。しかもその半島の面積は、日本の東海地方全域を合わせた面積よりもはるかに広いのです。このことからアメリカ大陸の広さの实感が少しは理解いただけるのではないのでしょうか。

ともあれ、私たちの搭乗機は数十峰の残雪の山岳地帯上空を飛行し、通常とは逆方向からシアトル空港に進入し、無事着陸しました。この日の風向きが通常とは異なっていたのでしょうか。飛行機の離発着は滑走路の風下から

からワシントン湖を隔てた向こう岸、（ベルビュー市）の中心部にあり、高層ビルのホテルです。（ベルビュー市）は、（シアトル市）に次ぐワシントン州第2の大都市で、隣接の（レドモンド市）と共に先端技術産業の中核を担っています。そして商業地域としてもシアトルダウンタウンに勝るとも劣らないほどの大発展を続けています。

ワシントン湖畔に係留されている数知れぬほどのヨットや大型クルーザー、湖に沈みゆく真つ赤な太陽を眺めながらの夕食は、まるでスイス地中海沿岸を彷彿とさせるものがあります。それもそのはず、このワシントン湖は、湖ではあっても水門での水位の上げ下げを利用してシアトル湾に繋がっていて、かなりの大きさのクルーザーが太平洋へ出入りできるので、そういう機能性において、ワシントン湖は陸封された湖ではないのです。

ここワシントン州は、特に水に関する規制が厳しく、たとえ住宅地の中であつても小さな川、池、湿地帯などが厳しく保護されています。シアトル神護寺の境内にも、小さな水流が2か所ありますが、



マイクロソフト本社
ビジターセンターにて



移動途中の給油所にて

水辺から両側に5メートルずつはセツトバックで一切手を加えることができません。ワシントン湖の湖畔も既存の施設以外、今では新しい開発は不可能でしょう。それは国家というよりも、州の独立性、権限が大きく、州ごとの考え方や意思が尊重されているからです。同性婚問題や人工中絶問題など、時々州によって考え方が異なっているのも州法の違いからなのです。

ワシントン州は、全米の州の中でも自然や環境保護に関する関心や規制が高く、これまでに「老後に住みたい地域」の全米1位に推されたことが幾度かあります。

シアトル到着から3日間は、シアトル在住の日本人家庭を訪問したり、夕食を共にしたりと和らいだ雰囲気の中で少しの交流を深めることができました。皆この地に暮らす若き企業戦士たちで、国際結婚家庭も多くあります。

シアトル神護寺

20年以上も前になりますが、私がシアトル在住時に開創した『シアトル神護寺』は、宿泊のホテルから車で30分ほどのところ、ヘレド



右上／移動途中の昼食(韓国&中華風メニューのレストラン)にて
左上・右下・左下／シアトル神護寺にて

ワシントン州の大自然

シアトル神護寺参拝を終えて、私たちは愈々ワシントン州の内陸部へのドライブに出発しました。

シアトルから東海岸ポストンまで7,000キロ以上も続くI-90を使って、シアトルから東に向って出発しました。行く手には、3,000メートル級の山並みがカナダ国境まで数百キロと続いています。カスケード山脈です。

時速100〜120キロで走ること約1時間、山脈の峠に到着

す。峠はスキー場になっていて6月なのにまだまだ残雪があります。

一息入れて再出発、峠越えとは言ってもアメリカのフリーウェイには、トンネルが一つもありません。それほどまでに谷が広いのです。さらに東に向かうこと1時間、シアトルからは200キロほどで景色は一変、樹木が一本もない穏やかな丘陵地が続いた後、ワシントン州で一番の大河コロンビア川を渡ります。コロンビア川を越えた辺りから景色はさらに一変、広い農園地帯へと入っていきます。



移動途中の広大な風景

シアトル神護寺視察記

高橋 栄真 僧侶

実に二十年ぶりの飛行機での旅、気持ちはワクワク・ドキドキです。言葉の壁をどう乗り越えるかと思案しつつも、何より西部住職の開山された寺(神護寺)を一目見てみたい、それにより住職の興正寺への思いを少しでもわかることができればと、シアトル行きを楽しみにしていました。

飛行機を降りると、窓の外には雪の積もるレーニア山。日本とは違う空気や雰囲気が感じられる景色や空間が広がっています。滞在したホテルも、ロビーや部屋の雰囲気、特にベットの高さなど、ここでも日本と違う体験を味わいました。三日目に訪れたシアトル神護寺の本堂内は、どこか法福寺を彷彿とさせる雰囲気がありました。

帰国後も、アメリカの広大さがいちばんの思い出として胸に刻まれています。住職が日頃より、「これからは、もっと違う国を体験することも必要」とおっしゃる意味を、あらためて実感する旅でした。



シアトルダウンタウン

異文化を体感した旅

職員 川村 恵子

旅が面白いのは、知らないことに出会えるから。それは人や景色、建築、食、文化・風習の違いが驚きと発見にあふれているからでしょう。今回のシアトルを起点としたアメリカ訪問も、知識として知っていることと体感することの違いをあらためて感じる旅でした。

とりわけ記憶に残っているのは、「合理性」の概念。日本では「能率的で無駄なく物事を進める」ことをさし、アメリカでは「道理にかなない、論理にのっとって進める」ことをさすように感じたことです。おそらく国の成り立ちも関わっていると思うのですが、単一民族の国家である日本には暗黙の了解があるため「改善」していくことでより良いものをめざし、他民族国家であるアメリカは基本的な共通認識がないため、皆が納得できる「ルール」が作られるのではないのでしょうか。交通ルールしかり、農地管理しかり。旅のあちらこちらで触れた異文化は考え方の起点を少しずつ試してみるきっかけになりました。

モンド市)郊外に位置しています。

最初は馬小屋を改装しただけの粗末なお堂からの出発でしたが、現在の本堂は木造宝形づくり朱塗り、内部は畳敷きの落ち着いた日本風です。広い境内は森に溶け込むように佇んでいます。境内は約4,000坪、その多くは山林で、大人3人が手をつないでも抱えきれないほどの大木に覆われている様子は、今も変わりありません。現在は、私の後を受け継いでくれた福田僧侶夫妻が護つていてくれます。

日本生まれで今はアメリカの企業で働く比較的若くて優秀な日

本人、彼らを新1世と呼んでいます。

すが、シアトル近郊にはその新1世が多く暮らしています。シアトル神護寺は、その新1世たちの心の拠りどころとして存在しているのです。国際結婚組も多く、その子供たち新2世も一緒に家族での参拝です。

日本を遠く離れてアメリカの地で暮らす新1世達、慣れない異国での生活には、様々な苦難も寂しさもあることでしょう。少しでも彼らの役に立ちたいと願って開創したシアトル神護寺が、かの地でこれから先も役立っていただけることを願い、今回の参拝を終えました。

雄大な自然が作り出す神秘的な風景

佐藤 基弘 僧侶

今回の旅を通じて感じたことは、まさに百聞は一見に如かずで、写真で見たり想像したものと、その場で体感することは全くの別物であるということだ。毎日毎日四〜五時間、車で移動をする中、見える景色はほとんど変わらず、大自然の威風堂々とした眺望が延々と続くのである。自然が作り出す神秘的な風景、「大自然の偉大さ、不思議さ」の前に、ちっぽけな私の心が少しだけ「おおらかに」、少しだけ「優しさ」を知り、全てを許そう、そう感じる事ができた。

自然が作り出す美しい全てのものに目を向け、人造社会がもたらす不安から心を解放するために、自然の神秘さや不思議さに感嘆できる感性を持ち続けたいと思う。

その後の行程も、アメリカ大陸の雄大さ、未知の大自然に感動しながら、私たちの1週間の旅は無事終えることができました。

今回の旅では、日本人旅行者に会うことは一度もありませんでした。そういうアメリカの旅をぜひ体験していただきたいと、この視察を企画させていただいたからです。

大自然の雄大さを前にして、人間の計らいなど如何にちっぽけなことを突き詰められた思いがします。今や世界中の人間社会は歴史的な大変動を前にしている

ように思えてなりません。それは、サムシンググレートの導きと享けとめるべきかも知れません。

人間にとつての便利さと快適さの飽くなき欲望追及が、どれほどに自然界をいたぶり続けてきたことを考える時に来ているように思えてなりません。この地球という生命体は、決して人間の為だけに存在しているのではないことを知るべきでしょう。

アメリカ大陸の大自然を前にしたとき、人間の力と計らいが如何にちっぽけで欲張りなものであるかを見せつけられた思いがします。



一期一会

いちいちえ

住職 西部 法照

今日、友人と出会った。今朝、知人と出会った。それが一期一会である。

その出会いは、私の生涯においてたった一度の出会いである。また明日会えるじゃないかというが、また明日会えるという保証はどこにもない。仮にまた明日会えたとしたならば、その時の出会いはまた、一期一会である。

一年間は365日であるが、今日の一日は決して今年の365分の一日ではない。365分の一日ではなく、後にも先にも掛替え

のない、たったひとつの今日一日である。そのようにして、今日の一日を大切にしていきたい。

その一日一日が積み重なって365日経ったとき、一年となる。だから、一年間の私の人生の姿は、今日一日の人生に現わされている。もし、今日の友人との出会いを疎かなものとしたならば、そういう一日一日の積み重ねとしての一年間が出来上がってしまうだろう。もし、目先の利害得失だけに囚われたならば、そのような積み重ねの生涯を送ることに

なるだろう。

今日の一日は、自分の生涯の中でたった一度の一日であり、同時に今日一日の中に自分の生涯の生き方が表現されている。

それを思うとき、今日一日を大切に生きたいと願う。そして、どんな些細な事柄にも真剣に臨み、どんな人との出会いにも最善を尽くしたいと願う。どんな出会いをも疎かにはしたくない、丁寧に丁寧に臨んでいきたい。そんな願いが、「二期一会」という法語にはある。

小春石路つわぶき

秋の終わり、十二月の珍しく暖かい日のことを小春日和という。小春は陰暦十月の総称、大和の国のやさしい言葉である。英語では、インディアンサマー、なんとなく気分がわかる。

小春日和の休日、庭に出てみると、ふとそこだけは日向ぼつこのようにひときわ明るい。石路の一群れが咲いている。青紫の淋しげな秋の花が終わり、花の少ない晩秋、暖かな黄色の花は、幸せが微笑んでいるようでもある。葉は、艶やかな濃い緑、花を引き立てるように丸くゆつたりとしている。石路の「つわ」は、「艶」の変化、艶やかな葉の様子を指している。路の名があるが、路のなかまではない。

明治三十三年生まれの私の祖母は、「小春」という名だった。八九歳までの長生きで達者なお年寄りだった。石路を見かけると、小春ばあさんを思い出す。暖かみやさしく、北風が吹き、粉雪が舞う頃になっても、庭の片隅に咲いている、小春ばあさんそのものよう。



花のエッセイと木版画
きおくにさくはな
高北 幸矢 著
風媒社 2019/1/1
季節に咲く花に託した、あの頃のあなたへの思い。木版画と文でつづった珠玉のエッセイ集。

きおくにさくはな — ことばの原風景 —

manabox 003 八事山 仏教文化研究所 寺宝Q&A

庶民を極楽往生へ導く、全国屈指の宝篋印塔群

立川武蔵代表(国立民族学博物館名誉教授)にお聞きしました。



立川 武蔵 氏

八事山興正寺の境内や自然豊かな参道には、345基の「宝篋印塔」が現存します。宝篋印塔とは「陀羅尼」を内に収めた経塔(供養塔)で、礼拝することで罪障が消滅し、苦を免れ長寿を得るとして信仰され、鎌倉中期以降石造りのものが多く造立されました。毎年中秋の頃の夜に行われる『燈供養会』では、参道の宝篋印塔や石仏とともに灯明が献じられ、護摩を焚く本尊大日如来堂への道を厳かに照らし出します。

Q 興正寺の宝篋印塔群について、どんな特徴がありますか？

立川…まずはその総数、これほど多くの「宝篋印塔」が集中して現存する寺院は、全国でもほぼ例を見ません。高野山でも200基ほどでしょうか。五重塔両側の8基の造立年は江戸時代と一部室町時代、その高台に位置する納骨堂圓照堂から九品台に至る坂道の両側に林立している109基は、江戸時代からのものです。



宝篋印塔

Q 印塔は誰が納めたものでしょうか？

立川…女人門跡の左側に尾張徳川家ゆかりの印塔が3基、他にも開山天瑞和尚か十五世壽泉和尚までの歴代住職の印塔も並んでいます。ですが、多くは尾張の商人や近郊の村人が寄進したもので、五重塔の建立しかり、興正寺は町人や農民の浄財によって支えられてきたお寺だということが見て取れます。

Q 宝篋印塔とはどういうものですか？

立川…まず重要なのは、「お墓ではない」ということ。「篋」は箱を意味しますが、中に入っている経筒には、骨(舍利)ではなく「陀羅尼経(真言)」が納められています。供養塔ではあっても、寄進する側はお墓とは別に釈迦や仏陀への信仰心を示したり、お寺に立てることで皆と共有するなど、より開かれた普遍的な意味合いを持つものではないかと考えられています。

もうひとつ興味深い考察として、サンスクリット文化を見る限り女性を表す意味や形が多くあり、宝篋印塔も「女神」として扱われてきたのではないかと考えています。たとえば、釈迦の遺骨を納めた仏塔「ストゥーパ」のように、大切な箱「宝篋」に陀羅尼を「孕む」の“として捉えらるると、まさに私たちは女神が向き合う“参道＝産道”を通して護られるというイメージが湧いてきます。

Q この研究についての主旨と目標は？

立川…まず、こうした様々な考察を含め、陀羅尼について私なりの視座で訳してみたいと思っています。次に、名古屋市内及び近郊のほとんどの寺院に必ず宝篋印塔が一基はあるのですが、これらの分布や歴史についての研究にも取り組んでいきます。また、小出見了(名古屋教育スポーツ振興事業団専門員)氏をはじめ、これまで様々な調査や論文文化が進められてきた資料を整理し、出版を考えています。専門書としてでなく、四季折々の風情、写真等もまじえつつ、一般の方にもこのような特殊な寺宝があることを知っていただける書籍を目指していきます。



八事山仏教シリーズ5
「花はほとけの身体である
— 生命への意味付け」
立川武蔵 著 発行：あるむ
興正寺の仏像や絵画を素材に、密教のほとけたちを紹介。宝篋印塔についての考察も掲載。

寺ごよみ
百景

「僧侶が描く曼荼羅の世界」〜金剛界曼荼羅〜

興正寺が所蔵する二幅一對の『両部曼荼羅（元禄期）』を元に、中道圭照僧侶が昨年は『大悲胎藏生曼荼羅』を、今年には『金剛界曼荼羅』の写仏を手がけました。今年の春より着手し、約半年間をかけて「而二不二（にふにふに）ながら一体である」という思想に基づき、「金胎不二（こんたいふにふに）」を完成させました。

金剛界曼荼羅は、「大日経」と並び真言密教でもっとも重要とされる経典「金剛頂経」等をもとに描かれた曼荼羅です。全体が九つに区切られ、上段中央（成身会）に大日如来さまが描かれ、「九会曼荼羅」とも言われます。

中道…金剛頂経は、根本仏として



頂点に君臨する大日如来の智慧が、金剛ダイヤモンドの如く堅固な悟り、すなわち何ものにも屈しない教えであるとして、一切を



成就した修行方法を説き、具体的な実践へと導く経典です。その修行方法が、「五相成身観」で、仏様と同様に私達が修行を重ねて



中道 圭照 僧侶

煩惱を滅し、悟りを開いていく段階を示唆しています。大日如来の智慧を中心に、多様な仏様それぞれが役割を果たしつつ智慧を申し合ひ、支え合う曼荼羅の世界観には、差別やいじめや争いはありません。その理想的な世界をめざして、私たちが組織に属しながら、自分の役割を果たすことで成長し、満足を得ていくというドラマチックな物語を、曼荼羅は私たちにメッセージしてくれているのだと感じています。

SNS View!

写仏についての情報はSNSでご覧いただけます。
#八事山興正寺



Facebook



Instagram



一服の
たしなみ
たのしみ

色の名前

先日、校外学習で六年生の児童がお寺に来てくれました。午前中いっぱいかけて、「友達のために抹茶を点てる」「日本の伝統建築を体感する」「掛け軸について知る」の三つをグループで順にまわりました。お寺は子どもたちの日常にはないものばかりで、興味津々。帰り際には「抹茶がおいしかった」「茶室の入り口から入るのは難しかった」「家にすり鉢があるから、岩を搗って絵具を作ってみた」と、感想を聞かせてくれました。見て、味わって、嗅いで、触れて、聞いて。五感をフルに使っての体験は何かしら記憶に残るのではないのでしょうか。

さて、子どもたちの話を聞く中で色の認識が単調なことに気づきました。表現としては「濃い青と薄い青」「明るい赤と暗い赤」といった具合に、色の名称を使う子が少なかったのです。青は青、赤は赤と大きく捉えており、個別で名称があることに驚い

ていました。これは、生活様式が洋風に変わる中で日本の伝統色に触れる機会が減ったことに起因するのではないのでしょうか。

伝統色はある地域や集団の中で、古くから受け継がれてきた色彩のことで、とりわけ日本はその多様性で群を抜いています。例えばアフリカは二六色、アメリカは一一七色、フランスは三三七色、中国は三三〇色のところ、日本は四七〇色とされています。自然のなかに見出してきた色の豊かさは四季をもつ日本ならではの。桜色、黄金色、翡翠色、茄子紺など、自然からとった名前からはそれがある情景まで鮮やかに思い浮かべることができ

ます。春から夏へ、短い秋を経て冬へ。巡る季節の中、通勤や通学、お買い物の中で見るものに自分なりの色の名前をつけてみてはどうでしょう。同じものとして一括りに捉えていたものが違って見えるかもしれません。

八事山の「八」は、裾野がひらかれた縁起の良い末広がりに。自然とまちなか、人と人とが、ゆるやかにつながって、豊かな「くらしの根」が広がっています。興正寺はその「むすびの広場」。さまざまな取り組みや活動、コミュニティ情報を発信していきます。

お寺のある暮らし 2024 お寺でまなぶ、あそぶ、つどう。 地域との協働で育む取り組み。

八事山興正寺では、仏教・仏事や歳時記に関わるさまざまな年中行事をはじめ、「仏教を伝える」「日本文化を伝える」講座や体験、また子どもたちの感性を豊かに育む『子ども寺子屋くらぶ』などの学びの場を設けています。また、興正寺公園の自然を守る市民活動団体『八事里山づくりの会』との協働など、くらしに身近な「やま寺まち寺」として、より親しみでもらえる取り組みに力を注いでいます。

2023年より〈八事山興正寺グランドデザイン構想〉として、「3S〜Simple・Small・Slow」をコンセプトに次世代に向けた「お寺のある暮らし」を提唱。その中で、地域の子どもたちにもひらかれた交流と学びの場づくりとして、昔から長く継続している行事、新たな視点での体験など新旧織りませつつ、多彩に展開しています。その一例をご紹介します。

お寺でわくわく体験「土を掘って布を染める」 開催日：2024年6月29日(土)

ライブラリーサロン華宮のサイン(看板)を自然の素材でつくるという計画のもと、その素材となる布を「興正寺内の土で染める」体験講座として企画しました。

「子どもたちにお寺での思い出をつくらせたい」と、近隣地域を中心に呼びかけ、当日は子ども会、当寺の『子ども寺子屋くらぶ』参加者を中心に小学生14名(大人13名※付添い)に参加いただきました。

講師の高橋孝治さんは、株式会社良品計画の生活雑貨部企画デザイン室を経て、2015年より常滑を拠点に企業や団体との

プロジェクトを多数手がけるデザイナー/プロデューサー。やきもの産地の陶土で布を染めるワークショップが、各地で人気です。今回も寺内の里山の土を採取し、砕く・ふるう染め土づくりからの作業予定でしたが、前日までの雨が整地中の凹みに溜まり、染め場として好都合とのことから、急遽全員で裸足になつての「泥んこ染め」となりました。

西山本堂(竹翠亭)への回廊にて、高橋さん自作の大絵本で土の誕生や種類、やきものの歴史について学び、土のサンプルに触れてから、大日堂前の広場へ。土がな



じむよう下処理済みの「あずま袋」の生地を手に、スコップで掘った大きな溝に入っていく、泥水に浸して染めていきます。

はじめは裸足で泥水に入ること躊躇していた子どもも、夏日の水の心地よさからか、シャツや頬まで泥まみれになってすっかり熱中。サイン用の大布は皆で連携し、すっかり職人はだしの手つきで染める様子に、親御さんたちも脱帽です。

いい汗をかいた後は、自然の土色に染められた布を干して、お抹茶と季節の和菓子で一服。季節の



お寺で夏祭り「盆踊り・精霊送り」 開催日：2024年8月15日(木)

ご先祖さまが帰ってくるお盆には、「盆・施餓鬼合同供養会」「初盆合同供養会」と併せて、境内にて露店などが立ち並び、「お寺で夏祭り」が毎年開催されます。大仏前には櫓が生まれ、提灯を掲げての「盆踊り」とご先祖を送り火で見送る「精霊送り」は、50年以上続く八事の夏の風物詩。現在は、興正寺と『八事商店街発展組合』との共催、『いりなか商店街発展会』協力のもと行われています。

開催に向けて、7月30日に盆踊りの稽古も行われ、踊り指導の方々と地元の子ども会から子どもたちが参加しました。当日は、直前の大雨で遅れたものの、『瀬戸子供太鼓こまいぬ座』による奉納演奏とともに、一気にお祭り気分が高まり、多くの人で賑わいました。

盆踊りは浴衣姿の参加者も多く、櫓の上では地元子ども会の子たちが元気よく踊って盛り上げてくれました。露天では輪投げや



サメ釣り、射的などを楽しんだり、大人も子どももお祭り気分を満喫。精霊送りとともにご先祖に感謝し、また息災を願いつつ、お寺ならではの夏のひとときを過ごしていただきました。

自然環境との共生が生む浄域、地域社会と交流する活気・賑わい、どちらの良さも相乗効果となり、心と暮らしの安寧・豊かさへ。

自然と、まちと、ひとと、お寺と。ともにふれあい、かわりあい、支えあつて和をむすび、次の世代のためのご縁おくりとなるよう、興正寺ではさまざまな取り組みや活動を通して、「お寺のある暮らし」を皆さまとともに育んでいきます。



風流とともに、お茶盃の扱いやいただき方のマナーも一緒に、和氣藹々と味わいました。参加者からは「面白かった」「泥水に入ったのが楽しかった」「家でもやってみたい」「また参加したい」という感想をたくさんいただきました。

準備されたまま作業するのでなく、こうして自らの手で一から支度したりつくり上げていく経験や、連携して動くことなどは、災害時などにも臨機応変にひらめく礎ともなるのではないのでしょうか。子どもたちが「やってみてほしい」と意欲的に体験を重ねていく機会を増やしていきます。

【第2号】令和6年10月
発行所 八事山興正寺

2024・秋



八事山興正寺

<https://www.koushoji.or.jp>

TEL 052-832-2801 FAX 052-832-8383



公式サイト